

七五年間の戦争

熊本県立八代高等学校

山口 凌

深い暗闇はどこまでも続いていた。周囲を唯一照らすものは、ヘッドライトだけ。ときどき肌を濡らす水は、つらら石から落ちてきたものだ。壁には黒く焼け焦げた跡が、くつきりと残っていた。火炎放射や艦砲射撃の痕だ。そんな場所で、私は一人で黙々と土をかき出していた。七五年前、そのガマ（壕）はまぎれもなく戦場だった。

私は戦後七十年の年、祖母と終戦特別番組を見ていた時だった。

「兄が沖縄で戦死した。遺骨も遺品も帰ってきていない。会いたい。」

初めて知った事実だった。自分の身近なところにも戦争の悲劇があったのだ。

戦争については以前から関心を持って調べていたが、全く知らなかったのだ。

祖母は沖縄を訪れることを夢見ていたが、体が弱り、困難になっていた。

「大伯父を故郷、熊本に連れて帰る」

私はそう誓った。

その後私は五年をかけて調べた。県庁に軍歴証明書を申請し、所属部隊「独立歩兵第一五大隊」を突き止めた。

ちょうどその時、私は沖縄で収集された遺骨とのDNA鑑定の存在を知った。

そこですぐに申請し、祖母のDNA検体との鑑定を行った。しかし該当する遺

骨はなかった。その後も鑑定が行われると連絡があると言われたが、連絡が来る事はなかった。

「自分で直接探すしかない」

私はそう思い、大伯父の軍歴証明書から手がかりを探し、改めて調べた。そうしているうちに陣中日誌の存在を知った。これは防衛省の防衛研究所がインターネットで公開しているものだ。この数百ページにも及ぶ陣中日記を読み進めていくと、沖縄における大伯父の足跡が少しずつ明らかになっていった。

昨年、新聞で沖縄での遺骨収集についての記事を読んだ。そこで、今年の二月、自ら遺骨収集ボランティアの方に連絡をし、初めて沖縄の地に降り立った。

翌日、私は糸満市で遺骨収集活動をした。ガマの中には多くの葉莢や防毒マスクの部品、手榴弾があった。七五年前で時間が止まっているようだった。四時間近く活動していると、小指ほどの大きさの骨片を見つけた。その時はほかに遺骨を見つけることはできなかった。しかし、確実に遺骨があった。また、ガマには数日前に発見された頭蓋骨があった。それを手にのせた時、「戦争はしてはいけない」ということを語りかけているようだった。骨はもろく、軽いが、それ以上にずっしりとした命の重みを感じた。

戦没者の戦争は今もなお続いている。

また、大伯父が戦死した場所は浦添市だが、そこはすでに開発され住宅街や

幹線道路となっており、遺骨収集は不可能に近い状態だった。私は陽が落ちるまで歩き続け、沖縄を後にした。

しかし現在、多くの若者が戦没者の今を知らない。それどころか、終戦の日すら知らないという人が増えている。このままではますます戦没者が故郷に帰ることが不可能になってしまう。私はそれを憂い、多くの人に伝えるために新聞に投稿した。これを多くの友人が見て、感想を話してくれた。その後も新聞の取材を受け、多くの人に戦没者の遺骨の現状について伝えることが出来た。

しかし本当にこれで良いのだろうか。近年修学旅行や学校における平和学習の時間が削減されている。ただでさえ若者が平和について考える機会や平和資料館の来館者が減少しているにもかかわらずだ。そのため、まずは私が聞き、調べ、見た戦争の悲劇を学校で伝える機会を設け、「戦争と平和」について考えていきたい。教科書で学ぶことが出来ない歴史を知り、伝え、平穏な日々に感謝すること。私たちの平和への一歩ではないだろうか。